

20009

抗血小板薬の内服状況とPATI 値の相関性に対する検証～SAT を減らす取り組み～

【はじめに】当院では Intervention 施行時、抗血小板薬を内服している患者に対し、PATI(血小板凝集閾値係数)を測定し管理している。当院で過去に PATI 値と SAT の相関性を検証した結果、SAT 症例の PATI 値は 37%程度、低値を示した(平均 $4.40 \mu\text{M}$)。この結果から、抗血小板薬を調整することで、SAT を減らせるのではないかと考えた。

【目的】抗血小板薬(8 種類)の内服と PATI 値の相関性を、多角的に検証を行う。

【対象及び方法】2012. 1. 1. から 2013. 8. 31 に PCI を施行し、且つ STENT を留置し PATI 値を測定した 2,919 件(男性 2,229 名・女性 690 名・平均年齢 68.6 ± 10.1 歳)を対象に、体表面積・年齢別・Risk factor・AMI 歴を抗血小板薬の内服状況にて比較し、PATI 値の変化を検討した。

【結果】年齢別比較において若年者及び高齢者に、多く投薬する傾向にあったが、体表面積・Risk factor 別の内服状況に有意差はなく、患者背景による投薬調整は困難であった。しかし、PATI 値が $5.00 \mu\text{M}$ 以下の患者には数種類の抗血小板薬を内服する傾向にあった。また、AMI 歴のある患者は PATI 値が低く、平均 PATI 値は $5.90 \mu\text{M}$ であった(非 SAT 症例 $7.74 \mu\text{M}$ ・SAT 症例 $3.26 \mu\text{M}$)。

【考察】日本人は CYP2C19 が欠乏しているとの報告があり、プラビックスの効果が低いとされている。また、副作用が伴う薬剤も多々あり、患者毎に調整することは必須と思われる。

【結語】多角的に PATI 値の検証を行っても、有意差を求めることは困難であった。従って PATI 値を確認することは重要であり、SAT 減少には必要な検査であると、再認識する結果となった。